



年間第 18 主日 (マタイ 14:13-21)

聖体をいただく私たちはイエスの手の中にあるパン

「弟子たちは言った。『ここにはパン五つと魚二匹しかありません。』」
(14・17) 人里離れた場所に五千人も人が集まって、弟子たちは食べ物
の心配をしています。しかし弟子たちは、イエスの起こす奇跡によっ
て、自分たちがいる場所の見方が変わっていきます。

夏休みをいただいて、県内で小さな巡礼をしようと思います。最初
は、もっと俗っぽいことを計画していましたが、一日千人を超える新型
コロナウィルス感染者が出る状況では、計画は断念せざるを得なくなり
ました。計画は大幅に狂いましたが、最終的に巡礼に行くことになった
のは、神様の考えがあったのでしょうか。

巡礼地と言えば、焼罪殉教公園も立派な巡礼地です。最近カテキス
タ委員会がかつて製作したという「カミロ・コンスタンツォ神父の殉教」
を扱った紙芝居を手にしりましたが、それによると海に突き出したあの丘
は、対岸の平戸の人々から、カミロ神父様の火あぶりの刑がよく見える
ようにと選ばれたのだそうです。実際にあそこが寸分違わぬ場所かどう
かは分かりませんが、説明は理に適っていると思います。

この世の中には、「廃墟」に特別な興味を持つ人がいると言います。
「廃墟女子」という言葉すらあるそうです。廃墟もかつては人が住み、
生活感があり、活気に満ちていましたが、そののちに廃れた場所です。
表面的には薄汚く、誰も寄せ付けない雰囲気を持っています。

しかしある人たちはその廃墟に、人間生活を読み取ります。廃墟に
人間の営みが読み取れることで、おそらく廃墟を訪れる人にとって価値
が上がるのでしょうか。廃墟ですらそうですから、焼罪公園についてはな
おさら当てはまるのではないのでしょうか。

7月の中旬、けいこの時間に小学校上級生の子供達を連れて焼罪殉
教公園に向かいました。この時カテキスタ委員会が作成した紙芝居も持
って出かけました。最初に祭壇の前に子供達を集めました。子供達に
とっては緑に囲まれた公園にしか見えなかったでしょう。紙芝居を読み
終え、もう一度公園を見渡した時に、子供達にも少し、この場所が違っ
て見えたはず。対岸の平戸ザビエル教会とその周辺からこの丘が見
える。その意味が、違って見えたと思います。

福音に戻ります。弟子たちは集まった大群衆の身体的疲労を心配し
ていました。群衆をこのまま残らせるのは、群衆を危険にさらすこと
になると考え、解散を命じてくださいとイエスに促すのです。しかしイ
エスにはたとえどんな場所でも、イエスがおられる場所は豊かであるこ
とを証明します。

そのためにまずイエスは、これから起こることをあらかじめ言葉で
知らせました。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を
与えなさい。」(14・16) 弟子たちはイエスの復活後もこの言葉を思い
出したでしょう。イエスが共におられるから、弟子たちは群衆に食べる

ものを与えることができるのです。

それでも弟子たちは目の前の心配が拭いきれません。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」(14・17) 直前のマタイ 13 章を重ねて考えると、「種を蒔く人」のたとえで蒔かれた御言葉が豊かに実を結ぶことを学んでいたでしょうし、「からし種」と「パン種」のたとえでも、あるいは「天の国」のたとえでも、大切なのはイエスが誰であることを理解し、学んだ者として留まることだと気づいているはずです。それなのに、五千人の群衆という「大きな試練」が大切なことを忘れさせていました。

「それをここに持って来なさい」(14・18)。外国語の翻訳も参考にしてもう少し言葉を付け加えましょう。「それをここに、わたしの所に持って来なさい。」イエスの手の中に、五つのパンと二匹の魚が置かれた時、豊かになります。イエスと繋がりを持ったなら、その土地やその人は豊かになります。

弟子たちはたんに五つのパンと二匹の魚の奇跡を見たのではありません。「イエスの手の中に置かれた五つのパンと二匹の魚の奇跡」を見たのです。私たちは当時の人里離れた場所に立ち会うことはできませんが、イエスの手の中にある五つのパンと二匹の魚を想像することができます。イエスの手の中にある時、それは五つのパン、二匹の魚のままでは終わらないのです。

私たちも、同じ経験ができないでしょうか。私たちが同じ経験をするとしたら、このミサではないでしょうか。そしてミサの中でイエスが五つのパン、二匹の魚となってくださり、私たちを満たし、私たちを通して驚くべきわざを行うのです。

私たちは日曜日ごとにここに集まっています。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」弟子たちが言う通り、ここには大勢の人を食べさせる食事はありません。けれども私たちがいただくパンは、司祭が、イエス・キリストの身分において父なる神におささげしたパンです。イエスの手の中に置かれたパンは、いつも大きな働きをします。私たちが日曜日ごとに御聖体に養われるなら、私たちが大きな働きをする手足となれるのです。

人里離れた場所で、あっと驚く教えを学んだ弟子たちのように、イエスは私たちにも呼びかけます。「あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」(14・16) 今度は私たちが「イエスの手の中にあるパン」となって、絶望の中に希望を、悲しみの中に喜びを、暗闇の中に光をもたらしましょう。私たちが小さなパンとなって、人に配られるために出かけましょう。私たちはここ、イエスが招かれたこの聖堂で、人に働きかけるのに十分な力を受けたのですから。